

第1回 こども急性疾患研究寄附講座(神戸市)公開講座

「新型インフルエンザ(H1N1)をめぐって」

日時

2009年12月5日(土) 15:00～

場所

「神緑会館・多目的ホール」

(神戸市中央区楠町7-5-1
神戸大学病院敷地内、地下鉄大倉山駅より徒歩5分)

あいさつ
公開講座

1. 15:10～15:50

小児の新型インフルエンザの現状

講師 神戸大学大学院医学研究科内科系講座小児科分野こども急性疾患研究部門
特命助教 藤林 洋美

2. 15:50～16:30

新生児と新型インフルエンザ

講師 神戸大学大学院医学研究科内科系講座小児科分野
助教 森岡 一朗

3. 16:30～17:10

新型インフルエンザと重症肺炎

講師 神戸大学大学院医学研究科内科系講座小児科分野 兼
神戸大学大学院医学研究科内科系講座小児科分野こども急性疾患研究部門
准教授 竹島 泰弘

参加費無料



お問い合わせ先

神戸大学大学院医学研究科内科系講座小児科分野こども急性疾患研究部門

TEL (078) 382-6090

主催：神戸大学大学院医学研究科内科系講座小児科分野
こども急性疾患研究部門(寄附講座)

後援：神戸市・神戸市医師会

1. 小児の新型インフルエンザの現状

神戸大学小児科こども急性疾患研究分野

藤林 洋美

2009年2月、メキシコで初めて感染が確認されて以来、新型インフルエンザ（パンデミック(H1N1)2009)は、今尚猛威を振るっています。日本においても5月9日に最初の感染者が報告され、6ヶ月あまりの間に推定累積感染者数は1000万人となりました。特に小児においては急速な広まりを見せており、高校生から始まった流行は徐々に低年齢層へ移っていった印象です。

臨床像で見ると、多くの子どもたちは軽症で推移し、治癒しており、その毒性は決して強くはありません。しかし、新型インフルエンザにかかる子どもたちが多くことから、相対的に、重症化する子どもたちが例年よりも多いことは否定できません。特に、やや年齢の高い子どもたちに脳症が認められていることや、喘息などの基礎疾患を持つ子どもたちで重症の肺炎となる子どもたちがいることなどが、今回の新型インフルエンザで特徴的です。また、亡くなるまでの経過が比較的短く、特に小児では、入院から亡くなるまで2～3日という症例もありました。新型インフルエンザになってしまったからといって過剰な不安を抱く必要はありませんが、2～3日の間は呼吸や意識状態に注意して観察することが重要です。抗インフルエンザウイルス薬も、現行では経口で内服できるタミフルと、吸入で使用するリレンザがあり、子どもたちの状態に応じて適したものを選択していきます。

また、新型インフルエンザに対する免疫は季節性インフルエンザワクチンでは得られないことが確認されており、新型インフルエンザに対するワクチンを接種する必要があります。接種開始時期、接種回数共に二転三転しましたが、神戸市においては、高校生までは2回接種で、1歳～小学校3年生は12月4日から、0歳児の保育者及び小学校4～6年生は12月下旬から開始する予定です。

多くの情報が錯綜していますが、新しく正しい知識を入手し、子どもたちを守っていききたいところです。

MEMO:

2. 新生児と新型インフルエンザ

神戸大学大学院医学研究科内科系講座小児科分野

森岡 一朗

新生児とは、出生から生後 28 日未満の赤ちゃんです。本講演では、新生児が新型インフルエンザ (A/H1N1) にかかるのか？、どこで新型インフルエンザにかかるのか？、どうすれば新型インフルエンザから守れるか？について説明します。

1. 新生児が新型インフルエンザにかかるのか？

一般に、母親自身のそれまでの感染歴や予防接種の経験によって獲得した免疫が胎盤や母乳から移行することによって、新生児は病原体から守られます。現在流行中の新型インフルエンザは今まで一度も流行したことがないインフルエンザウイルスであり、多くの人が免疫を持っていません。それゆえ、母親（妊婦）も免疫がないことが多く、新生児は免疫を受けることができないため、新生児も新型インフルエンザにかかる可能性があります。

2. どこで新型インフルエンザにかかるのか？

胎内（妊婦の子宮内）でかかる場合と発症者との接触・飛沫によりかかる場合があります。

3. どうすれば新型インフルエンザから守れるか？

新型インフルエンザから新生児を守るためには、母親（妊婦）が予防接種を受けることが重要です。出生後に母（父）親が発症した場合は、発症後 1 週間は新生児と離れることが必要です。

MEMO:

3. 新型インフルエンザと重症肺炎

神戸大学大学院医学研究科内科系講座小児科分野こども急性疾患研究部門

竹島 泰弘

現在流行している新型インフルエンザ (A/H1N1)の症状は季節性インフルエンザと類似しており、多くの患者さんは軽症で、数日で重症化することなく回復します。しかし、一部の患者さんでは重症化しており、死亡例も報告されています。日本小児科学会のまとめによると、11月以降乳幼児の死亡例が増加しており注意が必要です。重症化の原因となる合併症は、脳症、心筋炎、および重症肺炎です。本講演では、新型インフルエンザに伴う重症肺炎について説明します。

小児科学会のまとめによると、重症肺炎の合併した患者さんは242例（11月17日現在）で死亡例も3例報告されています。年齢のピークは6才であり低年齢化している傾向があります。重症肺炎の患者さんの27%は気管支喘息を有しており、気管支喘息の患者さんは注意が必要です。実際の患者さんの経過をみますと、発熱などの症状が出現してから、呼吸困難などの肺の症状がでるまでの期間は1日前後と短期間です。呼吸障害が重篤な場合は入院加療を要しますが、幸い多くの子ども達は、きっちりと治療をすれば数日の経過で改善しています。しかし、中には重症化し集中治療室で人工呼吸器を装着しなくてはならない患者さんもいます。実際の患者さんの経過を提示し、インフルエンザにともなう肺炎について説明します。

今回の新型インフルエンザは、従来の季節性インフルエンザに比べて肺に合併症をおこしやすいことが特徴で、動物実験などでもそのことは示されています。そのため、呼吸が速い、息苦しそうにしている、顔色が悪いなどの症状がみられたら肺炎の合併を疑わなくてはなりません。また、うとうとしている、意味不明な言動がある、けいれんなどは、もうひとつの重篤な合併症である脳症の症状として重要です。これらの症状がみられた場合は、早期に受診する必要があります。新型インフルエンザにかからないことが大事ですが、かかった場合には合併症のサインを見逃さないように注意しましょう。

MEMO: